

5 月度土曜例会（2018 年 5 月 10 日） 於：茨木市福祉文化会館

## “Millennial Catalonia Today”

### カタルーニャの 1000 年の道

モンセマリ  
Ms.Montse Mari (Catalonia Spain)

独立問題で揺れるスペイン北東部のカタルーニャ州。古くから栄えたこの地は支配と被支配の長い歴史の中で、独自の言語、文化を育むとともにカタルーニャ人としての“民族意識”を持っています。州都バルセロナ出身で永く日本に住む Ms.Montse Mari さんに“Millennial Catalonia Today”と題してその歴史や音楽について語っていただきました。異文化との混合が生み出すメリットと同時に難しさを考えさせる内容でしたが、時々、音楽を挟み、日本語を含めた冗談も入る楽しい講演でした。

#### カタルーニャを有名にした バルセロナ五輪とサッカー

講演の初めは「スペインとカタルーニャと聞いて何を連想しますか」という問いかけから。

出席者からまず、「サグラダ・ファミリア」の声。州都・バルセロナにある有名なカトリック教会だが、モンセさんは「私には地元にあるもので、それほど興味を示していなかったが、今や毎年、20 万人もの日本人がカタルーニャを訪れる。おかげで、設計者のガウディとこの教会に対する関心が高まりました」と話しました。

次いで、「バルセロナオリンピック」の声があり、モンセさんは「このオリンピック（1992 年）



とサッカーの世界的な強豪 FC バルセロナのおかげで、日本人がそれまで、スペインとしか連想しなかったことを、同時にカタルーニャを意



#### モンセ・マリさん

日本スペイン文化経済交流センター エクステンション代表。語学レッスン、留学手配、通訳・翻訳、文化イベントなどで活躍。関西カタルーニャセンター（大阪・中央区）ではカタルーニャ語レッスンや文化イベントを実施している。30 年以上前に来日。数か国語を操る。

識させることになりました」と説明しました。

(スペインの首都、マドリードに本拠を置くレアルマドリードと、FCバルセロナは強いライバル関係にあり、両チームの歴史と重なる試合になっている)。

カタルーニャの人口は750万人、バルセロナが州都。公用語はスペイン語とカタルーニャ語。スペインではこのほか同じラテン系言語のガリシア語がある。バスク語だけは新石器時代からこの地に住む人たちの言葉だ。

### 古くからの伝統文化

カタルーニャには古くから伝統的な音楽と踊りの祭りがある。人間ピラミッドのような「人間の塔」(世界の無形文化財)、大勢の人が輪になって



踊る伝統的なサルダーナ、カタカタとスティックをたたいて踊るウエポンダンス、巨大な人形の中に人が入ってパレードする巨人人形、大勢の人が火を持って町の中を走り回るファイアランなど。

### 日本への興味

モンセさんの日本への興味は、20世紀初めに米国人によって書かれた日本についての本を読んだことと日本的デザインのタペストリーを見たこと。また、ピアニストである母親がプッチーニ作曲のオペラ「マダムバタフライ」(蝶々夫人)を聞くよう勧めた。そこで、日本人の美のセンス、精神性に魅かれた。「日本に行きたくなった理由はたくさんありますが、きっかけになったのはオペラでした」。

### 著名人と音楽家

カタルーニャを世界的に有名にした著名人としてガウディのほか画家のアントニ・タピェス、サルバドル・ダリなど6人を、音楽分野では世界トップ級のチェロ奏者でケネディー大統領時代、ホワイトハウスで演奏したパウ・カザルス、オペラ歌手のモンセラート・カバリエとホセ・カレーラス、伝統音楽を奏でるジョルディ・サヴァールなど6人を紹介しました。

カタルーニャ人は一人だと店を開き、二人なら会社をつくり、三人だとコーラスを始める、と言われるほど音楽を愛する。

## 日本とカタルーニャ

16世紀に九州のキリシタン大名が派遣した天正遣欧使節団が、17世紀には通商を求めて支倉常長が率いる慶長遣欧使節団がスペインにやってきた。支倉の一行はバルセロナからローマに向かった。7年後に日本に帰ったが半分以上がスペインに残ったため、その子孫と思われる数百人がスペインの小さな町に住んでおり、そこでは90%の住人がハポン(日本)姓を名乗っている、という。

1970年代から日本との経済活動が活発になり、カタルーニャには現在160の日本企業の事務所がある。関西カタルーニャセンター(大阪市)は1998年、州政府から公認を受けた唯一のセンターで、カタルーニャ語のレッスンや文化イベントを開催している。

## カタルーニャの古代

この後は、カタルーニャ地方の波乱万丈の歴史。

紀元前の昔、ケルト人が北から、イベリア人が南からイベリア半島にやってきた。次いで、フェニキア人、カルタゴ人、さらにギリシャ人がやってきてコイン、鉱山業、数学、天文学、歴史、哲学、医学などを伝えた。新しい支配者ローマ人は法律、石造りの橋、街道、言葉、暦などを持ち込んだ。5世紀にゲルマン系の西ゴート族が侵入し、イベリア半島に王国を建設した。

## ムスリムの侵入



8世紀になるとムスリムがイベリア半島に侵入しカタルーニャも征服した。スペイン語には「オハラ」という言葉がある。これは「アラー、許されるなら、〇〇をするでしょう」という意味でムスリ

ムからもたらされたという。ローマ人はローマ数字や医学を、ムスリムはアラビア数字、米、アスパラガス、シルクワーム(蚕)、コーヒー、レモン、砂糖、紙などを伝えた。中国から伝わったこの紙はイベリア半島に伝わり、翻訳と印刷が行われた。グラナダのアルハンブラ宮殿のような美しいムスリム建造物も生まれた。

「私はイスラムの支配は悪かったと思わない。なぜなら、彼らは文明をもたらしたし、支配した地域の文化や制度を尊重したから」とモンセさんは言う。

## アラゴンとの連合王国

イスラムの侵攻を恐れたフランク王国のカール（伝説でシャルルマーニュ）大帝はピレネー山脈の南側（スペイン側）に進出し防衛のための辺境領を設置した。9 世紀にギフレー 1 世がバルセロナ伯に任命され、その子孫がこれを継承する世襲制を確立させ、カタルーニャ君主国を形成、主権を持った王国への道を歩みだした。



12 世紀になると、カタルーニャはイベリア半島東部に、アラゴン王国との連合王国を成立させ、15 世紀までにイタリア半島の南半分、ナポリ王国や西地中海のシチリア島などを領有しギリシャにまで勢力を広げて地中海帝国を形成した。海上のルール（Consulate of the Sea）をつくり、

貿易の必要から通貨の交換レート（Exchange Table）を定めた。

同じころ、イベリア半島中央部のカスティーリャ王国のイサベラ女王と、アラゴン王のフェルナンドによる結婚で連合王国が誕生。イサベラ女王の援助でコロンブスがアメリカ大陸を発見した。

## 相次いだ内乱と戦争

1640 年、収獲人戦争が起きた。フランスとスペイン王国の戦いの際、スペイン国王がカスティーリャ軍をカタルーニャに駐留させていたが、カスティーリャ兵は農民の家に放火し、作物を荒らすなど乱暴狼藉を働いた。加えてスペイン側は戦費調達のため、カタルーニャを搾取したことから農民たちは収獲のための鎌を手にして蜂起した。中央政府の言いなりで搾取に協力したとされたカタルーニャの副王だけでなく、貴族や大地主も襲撃、10 年もの内乱状態が続いた。

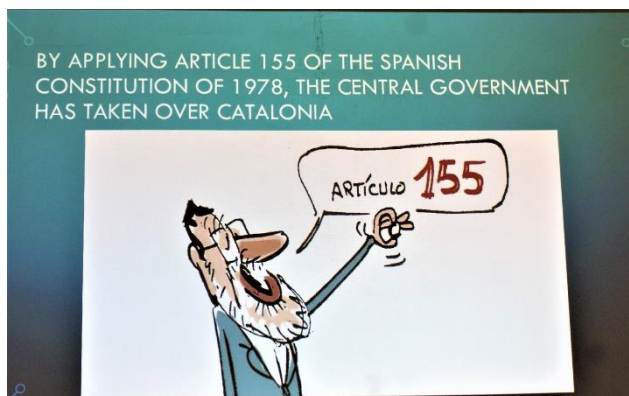
また、フランス対スペインの戦争でカタルーニャは南北に分断され北側はフランスに割譲された。（ここで、北側に住む娘が南側に住む両親をしのんで歌った「ナイチンゲールの歌」を CD で聞かせてもらう）

18 世紀に入ってスペイン継承戦争が起き、バルセロナは陥落しスペイン軍の占領下に入る。やがて、議会、政府が廃止され、カタルーニャ語も公的な場では使えなくなった。この戦争はオーストリア+カタルーニャ vs フランス+スペインの構図だが、イギリス、オランダなども関係しており、ユトレヒト協約で戦争は終わったもののカタルーニャ地域は分割されて小さくなり、ジブラルタルはイギリス領になった。

## 近現代

しかし、19 世紀に入るとカタルーニャは農業、工業、商業が発展し、同時に国家意識、自分たちの言語と文化の隆盛、政治的カタルーニャ主義が醸成されてきた。そこへ今度はスペインで内戦が勃発。フランコ将軍が権力を握り、絶対的な独裁政治を 40 年も敷き、カタルーニャに対してもスペイン語以外は禁止し、スペインでの多様性は否定された。

1975 年、フランコ大統領の死後、政治的な退廃が露見し、経済危機が増大、カタルーニャには愛国主義が台頭した。カタルーニャの人たちは「スペインのために多額の税金を払わされ、経済的な貢献が高いのに、他の地域と比べ見返りが少なすぎる」という不満が高まった。2013 年ごろからデモが多発、独立のための動きが活発になり 2017 年 10 月 1 日、住民投票が行われ、90%が独立に賛成した。が、投票率は低かった。警察の監視を恐れたようだ。



スペイン最高裁は憲法 155 条の規定により独立を違法とし、カタルーニャの指導者や議員は逮捕されたり国外に逃亡したりし、州政府の機能はマヒ状態に陥った。欧州諸国の多くはその歴史の中でスペインとカタルーニャのような類似のケースを抱えており、有効な提案を出せないままている。

以上

